大自然舞台に〝見守る保育〟

NPO法人 智頭町森のようちえん「まるたんぼう」の事例

「今日はどこの森に行こうか」―。

朝9時、保育スタッフが子どもたちに声をかける。その日の天候や子どもたちの意見で行き先が決まる。「ようちえん」だが決まった園舎はない。雨の日も雪の日も、子どもたちの日課はもっぱら森のお散歩。行き先が決まると、「森のようちえん・まるたんぼう」の1日が始まる。

■園舎のない「ようちえん」

主なフィールドは智頭町内の14カ所、町内全域を園舎として捉えている。昔ながらの瓦ぶき屋根が残る板井原集落、芦津の森林セラピーロード、諏訪神社、新田の通称〝西村山〟など村周辺の開けた森から奥地の原生林までバラエティーに富む。日々変化する表情やたくさんの命に囲まれている森。子どもたちが飽きることはない。

園舎を持たず、森の中で幼児教育や保育を行う「森のようちえん」は60年ほど前からデンマークで始まり、ヨーロッパを中心に世界中で浸透。毎日森に通うことで体力の増強はもちろん、創造力や観察力、危機回避能力やコミュニケーション能力など、さまざまな発達効果が期待され、日本でも100以上の団体が運営している。

まるたんぼうは2009年4月、中国地方初の「森のようちえん」として開園した。立ち上げのきっかけを作ったのは、智頭の大自然に魅せられ、吸い込まれるように移住した東京出身の女性。幼少期に父親の実家、高知を訪れた際に自然いっぱいの中で遊んで楽しかった思い出が脳裏に焼きついていた。

代表の西村早栄子さんは生まれも育ちも東京で、京都で過ごした大学院時代に鳥取市出身の男性と結婚したのが鳥取との縁の始まり。2003年、林業技師として鳥取県庁に入り、鳥取市での暮らしが始まった。

当時、県では「現場主義」の考え方から、林業技師も1週間泊まり込みの現場研修が課せられた。西村さんは智頭の林家に行くことになったのだが、「林業のイロハを学ぶつもりが、山のある暮らしと古民家の魅力に

すっかり取りつかれました。仕事のつもりが移住のきっかけになってしまった」と照れ笑う。

そして古民家を購入して2006年に移住。すでに5歳の長女、さらにおなかには2人目（長男）が宿っていた。田舎暮らしが始まり、時がたつにつれ子供の表情が良くなり、満足のいく子育てができていると実感した。「想像以上に良かった。これを1人で満喫するのはもったいないと思うようになり、ぜひ他の人も智頭に来て子育てしてほしいという思いが強くなった」と振り返る。

移住前、デンマークの森のようちえんの存在を知り、「いつかはこんな幼稚園に自分の子どもを通わせたい」とぼんやりとした夢を抱いていた西村さん。「移住」という行為が現実へと

■「これからは田舎の時代」

智頭町は人口約７８００人。面積の93％が山林で、かつては林業で栄えた町も過疎化による人口流出に歯止めがかからず、さらに鳥取道の全線開通で「通過される町」へと変わった。「ＩＪＵターンによる移住定住者確保しか町の存続の道はない」とまで言われている。

くしくも、若者が憧れを抱いた都会は通勤ラッシュや過重労働に悩まされ、一流企業では心の病が急増。「これからは田舎の時代」。寺谷誠一郎町長は次代をにらみ、大自然の田舎を前面に出すＰＲ戦略を始めていた。特に大災害時に智頭町に疎開できる〝疎開保険〟は全国から注目を集めた。森林セラピーでは、大学と連携して癒やし効果を医学的な見地でデータベース化するなどオリジナリティを追及しており、町のキャッチコピーも「杉の町」から「みどりの風が吹く疎開のまち」に変えた。

また、町民の声を反映して活力ある地域づくりを進めようと２００８年、「智頭町百人委員会」を設置。住民が身近で関心の高い課題を話し合い、これを解決するための政策を行政に提案していく組織だ。智頭町ならではの住民自治の実践を目指していたが、その教育文化部会の委員に西村さんの姿があった。森の幼稚園を実現させるため、自ら飛び込んでいた。

ベクトルを変えさせた。町主催の会合で幼稚園の設立を呼び掛けると、町のために一肌脱ぎたいという有志が集まり、勉強会を発足。先進地から講師を招いたり、月に1回森で散歩会を開くなどの準備を進めた。散歩会での子どもや保護者の反応をみて「これはいける！」と確信を得たという。近くに住む3児の母〝京ちゃん〟こと熊谷京子さんの存在も大きな支えとなった。

■「見守る保育」が柱

開園当初こそ園児2人、スタッフ2人というスタートだったが、年々増えていき、２０１３年度は定員枠いっぱいの28人が通園。保護者からは「風邪をひかなくなった」「感性が豊かになった」「自分で何でもやるようになった」などと好評で、評判が評判を呼び東京や大阪、広島などから子育てのために移住してきた人もいる。

人気が集まる要因の一つに、県や町などの行政による支援が挙げられる。保護者の安心感につながっているからだ。行政から支援を受けているケースは全国的にも珍しいが、ここは子育て王国を看板に掲げる鳥取県、さらに大自然がゆえに過疎化による人口減少が課題の智頭町。

舞台は調っていた。行政からの支援金は、保育士の人件費や鳥取市を往復する送迎バス、午後からの託児などにあてている。

まるたんぼうでは、〝見守る保育〟を柱に「体を鍛える」「心を育む」ことを保育方針として掲げる。一見どこでもありそうな方針だが、その現場が園舎を持たない森林となれば説得力を増す。子供たちは暑い夏も寒い冬も、一年中外で遊ぶ。四季を過ごすことで心身が鍛えられることは容易に想像がつく。

また、〝見守る〟という行為

も危険が隣り合わせの自然では難しいテーマ。川遊びや散歩、虫の観察に花の摘み取りなど、森での過ごし方は原則自由。自主性を尊重し、大人はあくまで「見守る」というスタンスで、けんかをしていても口を挟むことは少ない。当事者同士や周りが仲裁して解決するのを見守る。クラスも年齢分けもない「異年齢保育」も特徴の一つで、2歳児が年上の〝先輩〟の姿を見て何でも自分でやるようになることもあるという。

西村さんは「子どもは大人に導かれる存在ではなく、立派な一人の人間。小さくとも意思と考えを持ち、それを上手に伝えられないだけ。見守ることで子どもは自ら問題を解決し、大人はその姿に感動してますます子どもを尊敬し信頼するようになる。子どもは丸ごと受け止められたと感じ、自尊感情や他尊感情、信頼感が育つ」と語る。

見守ることを貫く以上、保育スタッフの任務は重要となる。保育士1人が7人の園児を見る体制を敷いており、「一般の園以上に安全に神経を尖らせている」と西村さん。「子どもの限界を見極め、危険から遠ざけるのではなく小さな危険と隣り合う中で活動させ、何が危険かを認識させることが一番の危機管理と考えている。実際、子どもはうまく危険に対処している」と話す。

また「幼児期には五感がもっとも発達する。それには森がぴったり。子ども特有の感性が開く」と説く。子供がたくましく成長する姿に、保護者から「子育てが楽しくなった」という声も聞かれると言う。森のガイドや週に1回「モノづくり」で町民とふれあうことも多く、生きる力や知恵を学んでいる。

■次なる夢は「森の小学校」

現在は、応募者が超過する状態となっており、2013年には新たな受け皿となる「空のしたひろば　すぎぼっくり」（熊谷京子園長）を開園した。また森の幼稚園設立の動きは各市町村にも広がっており、すでに大山町などでオープンしているほか、鳥取市でも4月に開園が予定されている。

森のようちえんが確実に広がりをみせている中で、西村さんの〝野望〟は次のステージに移っており、次なる夢は「まるたんぼう付属小学校」と目を輝かせる。フリースクールの設立だ。導入しているイギリスでは、全国からの移住者がケタ違いに増えているという。「今の公教育の代替えとして、別のスタイルがあってもいいと思う」と4月から休日限定で展開する予定だ。この更なる挑戦、教育行政に一石を投じることになりそうだ。

NPO法人 智頭町森のようちえんまるたんぼう

〈概要〉●所在地:八頭郡智頭町大屋160（まるたんぼうハウス）
●代表者:西村早栄子
●構成員:運営スタッフ3人、保育スタッフ5人
TEL 0858-71-0033
ホームページ http://marutanbou/org/

代表者のコメント

代表　西村早栄子さん

開園当初から智頭町独自の仕組みである「百人委員会」を通して事業化されたため、町からは金銭面だけでなくいろいろとサポートしてもらい、さらに町民からも応援してもらっています。これに県の補助制度も加わり、行政と良い関係を保ちながら活動を続けています。しかし、補助金はいつまでももらえるという保証はなく、何より毎年「使える良い補助金はないか」と探し回るのは大変な手間と精神的な労力を使い、運営が安定しないという弱点があります。ドイツのように国の認可を受けられるような仕組みができれば、子育て世代が地方に移り住むようになると思います。日本は国土の67％が森林。全国各地の森から子どもたちの元気な声が聞こえるようになれば、日本の未来も明るくなると思います。